川崎市蟹ヶ谷古墳群の発掘調査と神庭遺跡

高　久　健　二

１．はじめに

蟹ヶ谷古墳群は川崎市高津区蟹ヶ谷に所在し、多摩川右岸の多摩丘陵の東側に位置している。この多摩丘陵東端部は台地状を呈していることから、とくに下末吉台地とよばれており、その縁辺部は崖線がつづいている。多摩丘陵東端部には北西側から久地・下作延古墳群、末長・久本古墳群、馬絹古墳、蟹ヶ谷古墳群、日吉・加瀬古墳群などが分布している（図 1)。日吉・加瀬古墳群の白山古墳は全長 87m の前方後円墳であり、後円部の木炭槨からは三角縁神獣鏡をはじめとして、玉類、鉄器類などが出土しており、4 世紀代に築造された前期古墳と推定されている〔柴田ほか 1953、浜田 1996〕。また、馬絹古墳は直径 33m の円墳であり、埋葬主体部は泥岩を用いた切石切組積の三室構造の横穴式石室である〔樋口ほか 1973、竹石ほか 1994〕。築造年代は石室構造から 7 世紀代と推定されている。これらの地域は古代律令期における武蔵国橘樹郡に当たる。『日本書紀』巻第十八、安閑天皇元年（534 年）条に記された、いわゆる「武蔵国造の乱」の後に設置された橘花屯倉はその前身と推定されている。蟹ヶ谷古墳群の北西側には武蔵国橘樹郡の役所跡である橘樹郡衙跡と郡寺と推定される影向寺遺跡が存在する。

蟹ヶ谷古墳群は矢上川右岸の西側に谷を望む台地の頂上部平坦面に位置しており、北側崖線にそって北西側から 2 号墳、1 号墳、3 号墳が分布している（図 2)。このうち 1 号墳は前方後円墳であり、2・3 号墳は円墳である。また、台地の北側斜面と西側斜面では横穴墓も調査されている（図 3)〔呉地ほか 1986〕。今回の調査においても南側谷部斜面で横穴墓の痕跡が確認されており、本来は多数の横穴墓が存在していたものと考えられる。

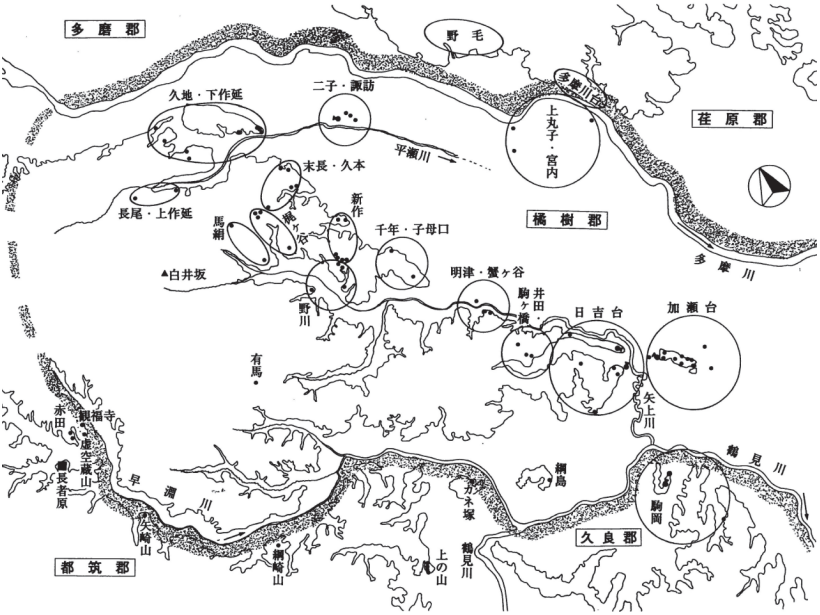

図1. 古代橘樹郡の推定範囲と古墳群〔浜田1996〕

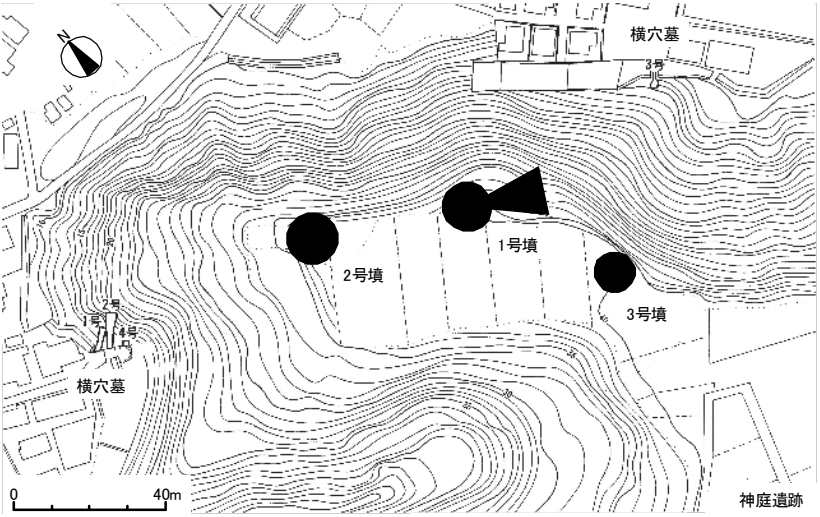

図2. 蟹ヶ谷古墳群・横穴墓群分布図

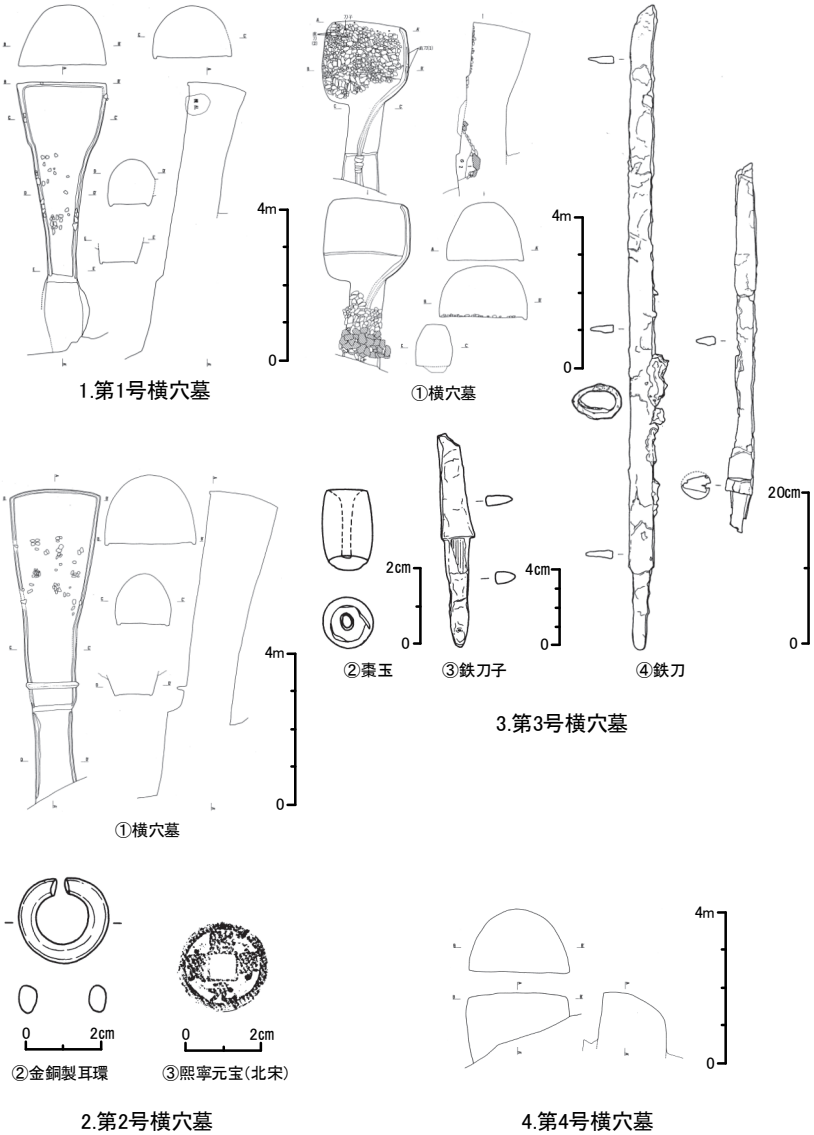

図3. 蟹ヶ谷横穴墓群〔呉地ほか1986〕

蟹ヶ谷古墳群については、その存在は以前から知られていたが、詳細は不明であった。このような蟹ヶ谷古墳群の実態を解明するために、2012 年 3 月に専修大学文学部考古学研究室と日本大学文理学部考古学研究室が中心となって「多摩川流域遺跡群研究会」を結成し、川崎市と「蟹ヶ谷古墳群の調査研究に関する協定書」を締結した。協定に基づき、多摩川流域遺跡群研究会と川崎市市民ミュージアムが協力して「蟹ヶ谷古墳群発掘調査団」を結成し[1)]、2012 年度から 2016 年度までの 5 か年計画で発掘調査をおこなうこととなった。これまで古墳の形状・規模・築造時期などを明らかにする目的で、墳丘の測量調査とトレンチ調査をおこなってきた〔新井 2015、新井ほか 2014、土生田 2016〕。今年度は 5 か年計画の最終年度に当たり、発掘調査報告書を刊行する予定である。

一方、蟹ヶ谷古墳群が位置する台地上には、神庭遺跡、井田伊勢台遺跡〔竹石ほか 1978〕、井田中原遺跡〔竹石ほか 1985〕などの集落遺跡がある。このうち神庭遺跡は蟹ヶ谷古墳群に隣接しており、その関連性が注目されるが、報告書は概報のみであり〔関ほか 1973・1974〕、詳細が明らかになっていない。神庭遺跡は蟹ヶ谷古墳群一帯における集落の状況を解明するためにも重要な遺跡である。

本稿では、まず 2015 年度末に実施した蟹ヶ谷古墳群の発掘調査の概要とその成果について整理する。ちなみにこれは 5 か年計画の最後の発掘調査である。つぎに、蟹ヶ谷古墳群に隣接する神庭遺跡の調査成果について概報をもとに整理し、蟹ヶ谷古墳群の造営集団を研究していくための基礎資料としたい。

２．2015 年度の蟹ヶ谷古墳群発掘調査概要

2015 年度の発掘調査は、2016 年 2 月 25 日（木）～3 月 13 日（日）におこなった（図 4)。その概要と成果は以下のとおりである。

（１）１号墳

1 号墳は本古墳群で唯一の前方後円墳である。現在の墳丘全長は約 27m で

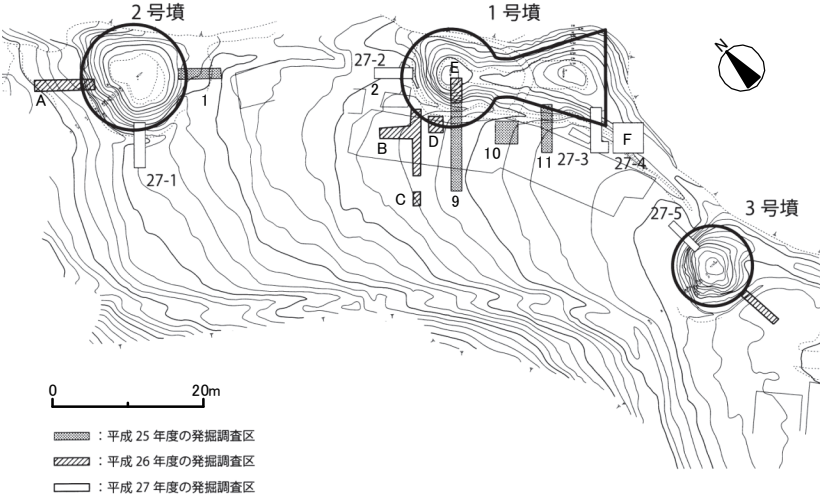

図4. 蟹ヶ谷古墳群トレンチ配置図〔蟹ヶ谷古墳群発掘調査団2016〕

あるが、墳丘の周囲が削平されているので、本来は 30m をこえる前方後円墳であったものと推定される。これまで、1 号墳に対しては墳丘測量およびトレンチ調査を行ってきた。2014 年度までの調査では、墳丘南側の 9・10・11 トレンチで周溝と推定される溝が検出され、前方部南側コーナー付近に設定したＦトレンチでは前方部の隅をめぐるように若干カーブした周溝と推定される溝が検出された。また、9 トレンチを後円部墳頂部側に延長したＥトレンチでは、墳丘盛土は確認できたが、埋葬主体部は確認できなかったことから、すでに削平されてしまっている可能性が高いことがわかった。

これらをふまえて、2015 年度の調査は前方部をめぐる周溝を確認することと、墳丘盛土の状況を確認することを目的として実施した。あらためて前方部側の平板測量をおこない、初年度に測量した図面に前方部下端のテラス状平坦面までを追加した。前方部南側コーナー付近に設定した 4 か所のトレンチ（27-3・4 トレンチ）では周溝の痕跡が検出され、地山を削り出して前方部の基底部を成形していることが確認できた。また、11 トレンチを墳丘側に延長し、盛土の状況を確認した。1 号墳からは埴輪が出土しており、6 世紀後

半～末頃に築造されたものと推定される。本古墳群のなかではもっとも時期的にさかのぼる古墳である。

（２）2 号墳

2 号墳は円墳であり、現在の墳丘直径は約 13m であるが、墳丘の周囲が削平されており、本来は現在よりも大きかったものと推定される。これまで 2 号墳については、墳丘測量をおこない、墳丘西側と東側にそれぞれトレンチを設定して調査をおこなった。2014 年度までの調査では、墳丘東側に設定した 1 トレンチにおいて周溝と墳丘盛土の一部が確認されている。

2015 年度の調査は周溝の残存状況を確認し、本来の墳丘規模を確定することを目的として実施した。まず、1 トレンチを東側に拡張した結果、周溝外側の立ち上がりを確認することができた。また、1 トレンチの南側に新たに設定したトレンチにおいても周溝が確認できた。この結果、墳丘の東南側には周溝が残っていることが明らかとなった。2 号墳からは埴輪が出土していないことからみて、6 世紀末～7 世紀初頭以降に築造されたものと考えられる。

（３）3 号墳

3 号墳は円墳であり、現在の墳丘直径は南北約 9m、東西約 11m であるが、本来の墳丘はかなり削平され変形してしまっているものと推定される。これまで 3 号墳については、墳丘測量をおこない、墳丘にトレンチを設定して調査をおこなった。2014 年度までの調査では、墳丘南側に設定したトレンチにおいて現在の墳丘から約 2m 外側から周溝の内側の立ち上がりが確認されている。

2015 年度の調査は墳丘北側で周溝を確認し、本来の墳丘規模を確定することを目的として実施した。墳丘北側のトレンチでは、南側トレンチと同様に、墳丘裾部からかなり離れた場所から周溝内側の立ち上がりが確認された。この結果からみて、本来の墳丘の直径は 18m 前後であったと推定される。3 号墳からも埴輪は出土していないことから、2 号墳と同様に 6 世紀末～7 世紀初頭以降に築造されたものと推定される。

（４）その他

1～3 号墳が立地する主尾根から西側に伸びる支尾根上にも地膨状の高まりが確認されており、須恵器の大甕片が出土していることからみて、古墳が存在する可能性が高いと考えられる。2015 年度はこの地区に対する平板測量調査をおこない、詳細な図面を作成した。今回のプロジェクトではこれらの古墳に対する発掘調査はおこなっておらず、今後さらに調査を継続する必要があると考えられる。

３．神庭遺跡の調査内容とその意義

神庭遺跡は蟹ヶ谷古墳群の南側に隣接しており、南東側には井田伊勢台遺跡がある。神奈川県立中原養護学校の建設にともない、1972 年と 1973 年の 2 次にわたって発掘調査がおこなわれ、それぞれ概報が刊行されている〔関ほか 1973・1974〕[2)]。それらによれば、神庭遺跡は縄文時代中期から古墳時代後期にかけて営まれた集落遺跡である。2 回の発掘調査によって、縄文時代の住居跡 41 基、土壙 1 基、小ピット群 1 基、弥生時代の住居跡 90 基以上、古墳時代の住居跡 45 基、歴史時代の住居跡 1 基、地下式土壙 1 基、溝 5 条などが検出された（図 5)。

まず､縄文時代の住居跡 41 基はいずれも縄文時代中期に属するものである。その内訳は加曾利ＥⅠ式期が 4 基、加曾利ＥⅡ式期が 37 基であり、後者が主体を占める。住居は弧状に分布しており、本来は環状あるいは馬蹄形を呈していたものと推定されている（図 6)。住居は隅丸方形を基本とするが、バリエーションがみられる。住居跡は 4 本柱が基本であり、炉の奥壁側に支柱穴をもっている。炉跡は加曾利 ＥⅠ式期の住居跡の場合、すべて埋設土器炉であるのに対し、加曾利 ＥⅡ式期の住居跡の大部分は石囲炉であった。また、加曾利 ＥⅡ式期の住居跡には南側に埋甕があり、出入口施設と関連するものと考えられている。出土遺物は、土器、土器片錘、土製円盤、打製石斧、磨製石斧、石鏃、凹石、石皿、滑石製勾玉などである。このうち土器には、早期（尖底・芽山式)、前期（十三菩提・踊場式)、中期（下小野・五領ヶ台・阿玉台・勝坂・加曾利ＥⅠ～EⅢ式)、後期（称名寺・堀之内式)、晩期（安行

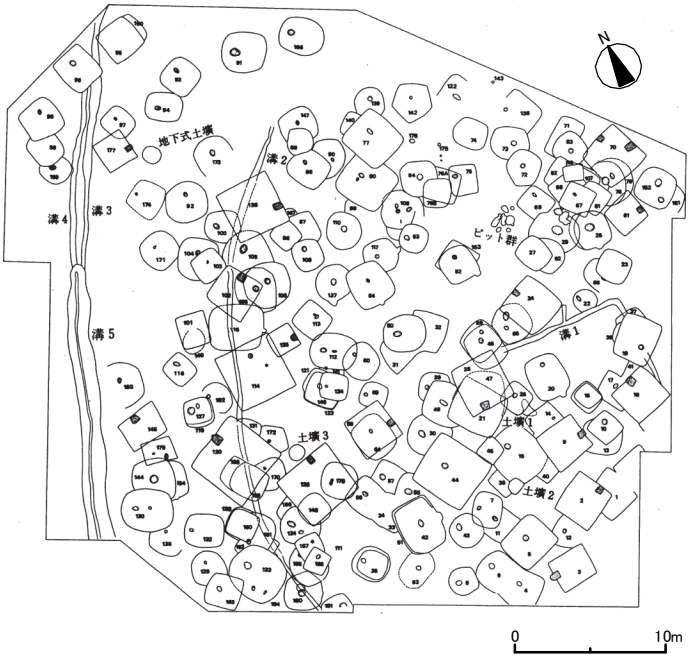

図5. 神庭遺跡遺構分布図(1・2次調査)〔関ほか1974〕

Ⅲ式）のものがみられることから、遺構は中期のものしか確認されていないが、当該台地上にはすでに早期から居住がはじまり、晩期まで継続していたことがわかる。加曾利 E 式期の 92 号住居跡は平面形態が円形を呈するものであり、壁溝や柱穴などからみて拡張がおこなわれたと推定されている（図7)。北側に素掘炉と石囲炉があり、炉の南側には埋甕がある。同じく加曾利 E 式期の 110 号住居跡も平面形態が円形を呈し、壁溝がめぐる（図 8)。中央部に炉があり、炉の南西側壁溝内に埋甕がある。

つぎに、弥生時代の住居跡は 90 基以上と最も多く、神庭遺跡の最盛期であったことがわかる（図 9)。これらの住居跡はいずれも弥生時代後期のものである。報告書には後期前半の久ヶ原式期から、弥生町式期、前野町式期へと継続して住居が存在すると記されていることからみて、ほぼ途絶えることなく、集落が営まれていたものと考えられる。そのなかでもとくに後期後半

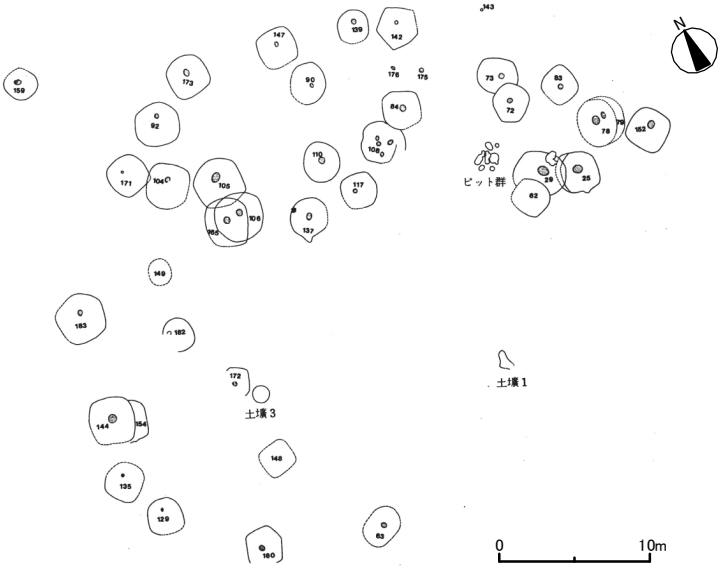

図6. 神庭遺跡における縄文時代の遺構分布図〔関ほか1974〕

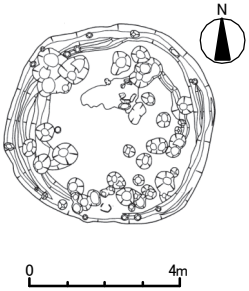

図7. 神庭遺跡92号住居跡
〔関ほか1974〕

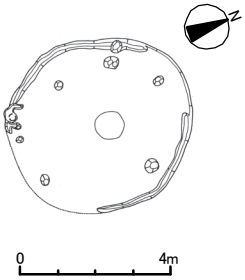

図8. 神庭遺跡110号住居跡
〔関ほか1974〕

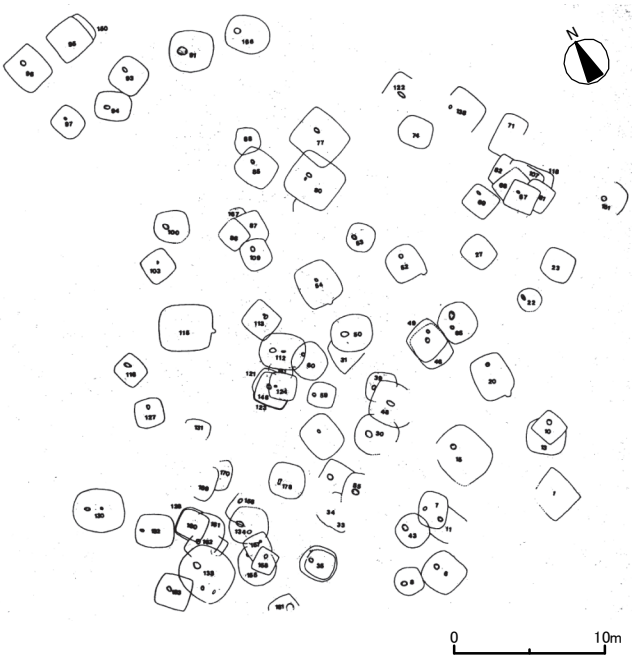

図9. 神庭遺跡における弥生時代の遺構分布図〔関ほか1974〕

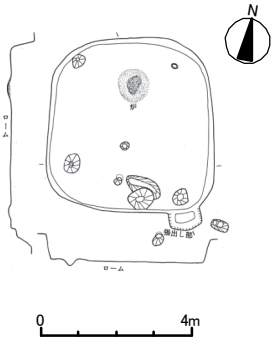

図10. 神庭遺跡52号住居跡〔関ほか1973〕

図11. 神庭遺跡における古墳時代の遺構分布図〔関ほか1974〕

の住居が多いと推定される。住居の平面形態は胴張をもつ隅丸長方形から隅丸方形をへて方形へと変化しており、地床炉をもつものが大部分を占める。52 号住居跡は弥生町式期と報告されているものであり、平面形態は隅丸方形を呈する（図 10)。北側に炉をもち、南東隅に張出部があり、入口と推定されている。また、46 号住居跡（弥生町式期）の南壁下から有茎銅鏃 1 点が出土している。

最後に古墳時代の住居跡は合計 45 基であり、前期（五領式期)、中期（和泉式期)、後期（鬼高式期）のものがみられる（図 11)。前期の住居跡は 20 基以上が検出されているが（表 1)、弥生時代後期末の住居跡との区別が困難であると報告されており、弥生時代とされている住居跡のなかに古墳時代前期初頭のものが含まれている可能性がある。これは弥生時代から古墳時代へと継続して集落が営まれていることを示すとともに、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の住居数は 50 基を超えるものと推定され､集落の最盛期であっ

たと考えられる。住居跡の平面形態は隅丸方形あるいは方形を呈するものが多く、炉をもつものが主体を占める。また、115 号住居跡の西側では台付甕 2 点、杯 2 点が出土しており、前期の祭祀跡ではないかと推定されている。

古墳時代中期の住居跡は 2 次調査で検出された 101･114 号住居跡の 2 基のみである（表 2)。これら 2 基の住居跡は和泉式期後半に該当すると報告されていることからみて、およそ 5 世紀中葉～後半のものではないかと推定される。したがって、前期の集落との間には断絶期間が認められ、5 世紀中葉頃になって新たに集落が形成されはじめたことがわかる。114 号住居跡は平面方形の大型住居であり、北壁側に炉をもち、南壁側に 2 個のピットがある。まだ竈は出現していないようである。

古墳時代後期の住居跡は 16 基であり、前半期（鬼高Ⅰ式古段階）と後半期（鬼高Ⅱ式期）に分けられる。前半期の住居跡は 13 基（2・9・18・24・28・58・61・70・102・120・125・126・136 号住居跡）であり（表 3)[3]、後半期は 3 基（145・177・179 号住居跡）である（表 4)。おおよそ前半期は 5 世紀後葉、後半期は 6 世紀中葉と推定され、前半期と後半期の間にも断絶期間が存在したようである。前半期の住居跡である 120 号住居跡では炉と竈が検出されており、炉から竈への変化を示している（図 12)。神庭遺跡のおける竈の導入時期はおおよそ 5 世紀後葉頃と推定される。武蔵地域における竈の導入は本庄地域などの北部では 5 世紀前葉までさかのぼるが、南部では 5 世紀後葉に導入する地域が多い。神庭遺跡における竈の導入は南武蔵の状況とほぼ一致するといえる。2 号住居跡は平面形が隅丸方形を呈し、4 本柱である（図 13)。東壁の南寄りに竈をもち、東南隅には貯蔵穴がある。その西側にはロームブロックや暗褐色土を叩きしめた土間状施設がある。9 号住居跡も同様に東壁に竈、東南隅に貯蔵穴があり、貯蔵穴の西側に土間状施設をもつ（図 14)。136 号住居跡は平面形態が方形を呈し、周囲に壁溝がめぐり、4 本柱である（図 15)。東壁の南側に竈が設置されており、竈の南側に貯蔵穴がある。貯蔵穴の西側には土間状施設がある。小型住居跡である 61 号住居跡では滑石管玉 4 点、鉄鎌 1 点、土師器杯 3 点、土器片など多くの遺物が出土している。115 号住居跡の西壁近くから長方形ピットを伴う土器群（杯 6 点、丸底深鉢 1 点、勾玉形土器片 1 点）が出土しており、この場が前期に引き続き、祭祀場とし

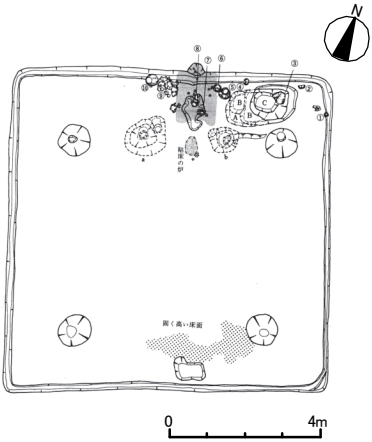

図12. 神庭遺跡120号住居跡
〔関ほか1974〕

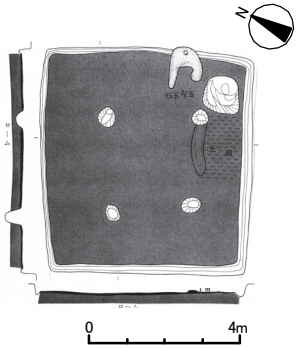

図13. 神庭遺跡2号住居跡
〔関ほか1973〕

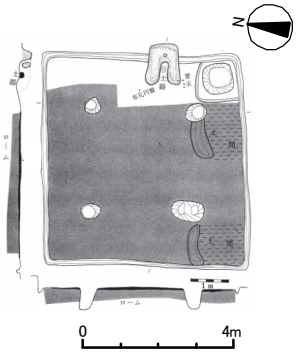

図14. 神庭遺跡9号住居跡
〔関ほか1973〕

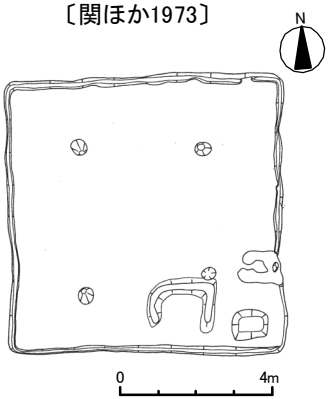

図15. 神庭遺跡136号住居跡
〔関ほか1974〕

て使用されていたと推定される。後半期の住居跡はいずれも小型であり、その後、まもなく集落は放棄される。

この他に歴史時代（平安時代？）の住居跡が 1 基だけ検出されている。また、179 号住居跡の東側で地下式坑 1 基が発見されている。この地下式坑は竪坑（上部長径 2.4m・短径 2.2m）と主室（長さ 3.8m、幅 3.1～2.7m）からなっている（図 16)。地下式坑は関東地域で中世を中心にみられ、埋葬関連施設

であるという説と貯蔵施設であるという説がある〔東国中世考古学研究会 2009〕。神庭遺跡で検出された地下式坑からは遺物がほとんど出土していないため、その時期・機能は不明である。また、溝状遺構 5 本が検出されている。このうち溝 5 は幅 2～3.5m であり、断面形は V 字形を呈する。ピット（杭？）群もともなっており、集落を取り囲む環濠の可能性もあるが、詳細は不明である。

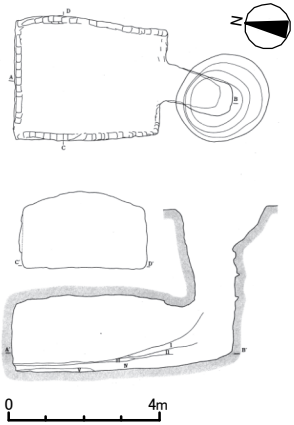

図16. 神庭遺跡地下式坑〔関ほか1974〕

以上、神庭遺跡の 1・2 次調査の概要を整理した結果、蟹ヶ谷古墳群と関連する神庭遺跡の古墳時代の集落は前期で一度断絶し、中期後半になって再び形成され、後期に廃絶したことがわかる（図 17）。北武蔵地域においても、5 世紀中葉～後葉に大型拠点集落から分村した中・小型集落が形成され、6 世紀前葉頃には廃絶してしまう短期廃絶型集落が多くみられる[4)]。神庭遺跡の場合も基本的にこれらと同様であったものと考えられ、近隣地域に母村としての拠点集落が存在した可能性がある。この拠点集落こそが蟹ヶ谷古墳群造営に関与した集団ではないかと推定される。その場所については、台地下の矢上川の沖積地に移動したのではないかという見解もあるが、依然として台地上に存在した可能性も否定はできないだろう。

４．おわりに

本稿では、まず 2015 年度末に実施した蟹ヶ谷古墳群の発掘調査の概要とその成果についてまとめた。5 か年計画の最後となる今回の発掘調査によって、古墳のおおよその規模を把握することができた。2012 年度から 4 年間にわたって実施した蟹ヶ谷古墳群の発掘調査については、2016 年度で一端終了し、

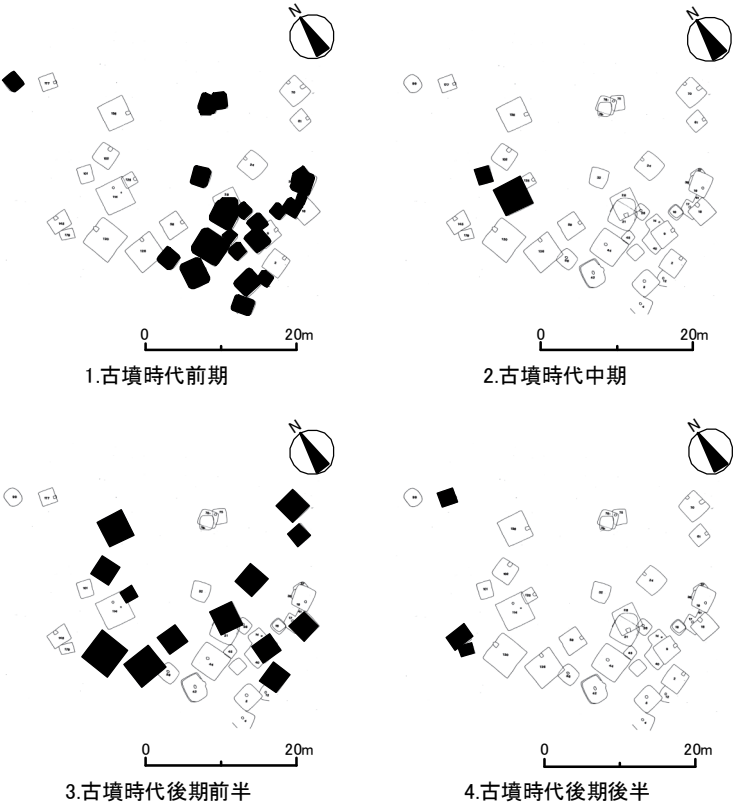

図17. 神庭遺跡における古墳時代住居跡の時期別分布

調査報告書を刊行する予定である。ただし、2 号墳と 3 号墳の埋葬主体部や 1～3 号墳以外の古墳の性格の解明、周囲の横穴墓の状況把握など未解決の課題も多く残されており、今後も継続的な調査が必要といえる。

蟹ヶ谷古墳群に隣接する神庭遺跡については、蟹ヶ谷古墳群と中心年代はずれてはいるが、蟹ヶ谷古墳群が造営される背景を解明するために重要な遺跡であるといえる。既刊の概報からは得られる情報が限られており、神庭遺跡における集落の実態を解明するためには、出土資料の検討や周辺遺跡との比較など総合的に研究していく必要がある。今後、蟹ヶ谷古墳群の調査と合

わせて神庭遺跡など周辺の集落遺跡の再検討もおこなっていきたいと考えている。

謝辞

本稿を作成するにあたり、川崎市市民ミュージアムの新井悟氏に資料収集等でご協力いただきました。文末ではありますが、記してお礼申し上げます。

参考文献

新井悟 2015「蟹ヶ谷古墳群の発掘調査」『専修大学人文科学研究所 2015 年度第 2 回公開講演会 蟹ヶ谷古墳群の発掘調査』

新井悟ほか 2014「高津区蟹ヶ谷古墳群測量調査報告」『川崎市市民ミュージアム紀要』第 26 集

蟹ヶ谷古墳群発掘調査団 2016『蟹ヶ谷古墳群発掘調査説明会資料』蟹ヶ谷古墳群発掘調査団・川崎市教育委員会

川崎市 1988『川崎市史 資料編 1－考古 文献 美術工芸－』川崎市

川崎市 1993『川崎市史 通史編 1－自然環境 原始 古代・中世－』川崎市

呉地英夫ほか 1986『蟹ヶ谷横穴墓群発掘調査報告書』玉川文化財研究所

柴田常恵ほか 1953『日吉加瀬古墳』考古学・民族学叢刊第二冊、三田史学会

関俊彦ほか 1973『東神庭遺跡－第 1 次調査概要－』東出版

関俊彦ほか 1974『神庭遺跡－第 2 次調査概要－』東出版

高橋一夫 1990「東日本の集落」『古墳時代の研究』2　集落と豪族居館、雄山閣

竹石健二ほか 1978「川崎市中原区井田伊勢台遺跡発掘調査報告書」『川崎市高津区平風久保遺跡発掘調査報告書・川崎市中原区井田伊勢台遺跡発掘調査報告書』川崎市文化財調査報告書第 5 冊、川崎市教育委員会

竹石健二ほか 1985「井田中原遺跡（第二次）発掘調査報告」『川崎市文化財調査集録』第 21 集、川崎市教育委員会

竹石健二ほか 1994「発掘調査」『神奈川県指定史跡馬絹古墳保存整備・活用事業報告書』川崎市教育委員会

東国中世考古学研究会 2009『中世の地下室』高志書院
土生田純之 2016「川崎市蟹ヶ谷古墳群の発掘調査」『専修大学人文科学年報』第 46 号
浜田晋介 1996「古代橘樹郡の古墳の基礎的研究」『加瀬台古墳群の研究Ⅰ－加瀬台 8 号墳の発掘調査報告書－』川崎市市民ミュージアム
樋口清之ほか 1973「川崎市高津区馬絹古墳発掘調査概報」『川崎市文化財調査集録』第 8 集、川崎市教育委員会

表 1. 神庭遺跡における古墳時代前期の住居跡

番号	平面形態	規模(m)	壁溝	柱穴数	炉	竈	貯蔵穴
4 号	隅丸方形	3.5(現)×3.4(現)	―	4	北	―	―
5 号	隅丸長方形	6.1×5.3	―	4	北	―	―
12 号	不明	不明	―	4	北西	―	北西
14 号	隅丸方形	4.2×3.2(現)	有	4	東南	―	―
16A 号	隅丸方形	3×2.65	―	―	―	―	―
16B 号	隅丸方形	3.57×3.3	―	―	―	―	―
17 号	隅丸方形	4.7×3.7	―	―	北	―	―
19 号	隅丸長方形	5.9×4.95	有	4	南西	―	―
21 号	隅丸方形	6.4×6.2	―	―	中央	―	―
26 号	隅丸方形	3.65×3.2	有	―	北	―	南壁中央
32 号	方形	4.6×？	―	―	―	―	―
36 号	隅丸方形	不明	不明	不明	不明	不明	―
37 号	隅丸方形	3.5(現)×？	不明	不明	不明	不明	―
38 号	方形	3.4×1.9(現)	―	―		―	―
40 号	方形	2.3(現)×1.6(現)	―	―	不明	不明	―
41 号	不明	2.2(現)×？	不明	不明	不明	不明	不明
42 号	隅丸長方形	6.75×5.6	―	2	中央	―	―
44 号	方形	8.5×7.6	―	4	北	―	南東 南東
45 号	方形	2.9(現)×2.8(現)	―	―	―	―	―
47 号	隅丸方形	不明	不明	不明	不明	不明	不明
51 号	隅丸長方形	6.4(現)×4(現)	―	不明	不明	不明	―
56 号	隅丸方形	4.35×4.2(現)	―	―	北	―	―
75 号	方形	4.05×3.6	―	―	北西壁	―	―
76A 号	方形	3.3×4	―	4	不明	不明	―
76B 号	方形	3.6×3.52	―	4	―	―	―
99 号	隅丸方形	4.8×4.1	―	―	不明	不明	―

表 2. 神庭遺跡における古墳時代中期の住居跡

番号	平面形態	規模(m)	壁溝	柱穴数	炉	竈	貯蔵穴
101 号	方形	4.4×3.85	不明	―	不明	不明	―
114 号	方形	7.8×7.78	―	4	北壁	―	南東隅 南壁寄

表 3. 神庭遺跡における古墳時代後期前半の住居跡

番号	平面形態	規模(m)	壁溝	柱穴数	炉	竈	貯蔵穴
2 号	隅丸方形	5.9×5.5	有	4	―	東壁	東隅
9 号	方形	5.5×5.4	有	4	―	東壁	南東隅
18 号	方形	5.75×5.5	有	4	―	北壁	南東隅
24 号	隅丸方形	6×6	有	4	―	北壁	北壁東寄
28 号	方形	6.7×6.2	有	5	―	南壁	南西
58 号	方形	5.7×5.6	―	4	―	東壁	東南隅
61 号	方形	4.4×4.3	―	―	―	東壁南寄	南東隅
70 号	方形	6.3×6.18	有	4	―	東壁	北西
						西壁	北東
102 号	方形	5.5×5.3	有	4	―	北東壁	東隅
120 号	方形	8.6×8.5	有	4	―	北壁東端	北東
125 号	方形	3.55×3.3	有	1	―	東南壁	東南隅
126 号	方形	7.6×7.6	有	4	―	東壁南寄	北東
						北壁東寄	
136 号	方形	7.25×7.25	有	4	―	東壁南寄	南東隅

表 4. 神庭遺跡における古墳時代後期後半の住居跡

番号	平面形態	規模(m)	壁溝	柱穴数	炉	竈	貯蔵穴
145 号	長方形	5.7×4.1	有	4	―	北壁中央	―
177 号	方形	4.2×4.2	有	8	―	東壁中央	東南隅
179 号	長方形	4.15×3.05	有	9	―	南壁東寄	南東隅

註

(1) 蟹ヶ谷古墳群発掘調査団の構成は以下のとおりである。
団　　長：土生田純之（専修大学文学部教授・多摩川流域遺跡群研究会代表）
副　団　長：川崎市市民ミュージアム館長
参　　与：浜田晋介（日本大学文理学部教授・多摩川流域遺跡群研究会副代表）
主任調査員：高久健二（専修大学文学部教授・多摩川流域遺跡群研究会会員）
山本孝文（日本大学文理学部教授・多摩川流域遺跡群研究会会員）

(2) 1 次調査の報告書では「東神庭遺跡」、2 次調査の報告書では「神庭遺跡」となっているが、本稿ではこれらを合わせて「神庭遺跡」と称することとする。

(3) 2 次調査報告書では後期前半期の住居跡として 8 号住居跡があげられているが〔関ほか 1974〕、8 号住居跡は平面形が円形を呈する弥生時代の住居跡であり、9 号住居跡の誤植と判断した。

(4) 高橋一夫は東日本の古墳時代集落には拠点集落（母村）である継続型集落と廃絶型集落があり、後者が多数を占めるとする。〔高橋 1990〕。